

聖書：ルカ 22：47～62

説教題：主に見つめられて

日時：2013年1月20日

イエス様は今日の箇所では敵の手に渡されます。祈るためにオリブ山に出ていたイエス様と弟子たちのところに、突然群衆が現れます。その先頭には何とユダが立っていました。彼はイエス様に近づいて、口づけしようとしています。マタイの福音書の並行記事を見ると、ユダは前もって合図を決めておいて、「私が口づけをするのが、その人だ。その人をつかまえるのだ。」と言っていたことが記されています。時は真夜中、暗い森の中。イエス様を見間違えて、他の人を捕まえる失態を演じないように、まずユダがこの行動を取る手はずになっていたのです。イエス様はそんな彼に「ユダ。口づけで、人の子を裏切ろうとするのか。」と言われます。イエス様は慌ててこう言ったのではなく、彼に最後の警告を与えられたのです。自分がしようとしていることはどんなことなのかを彼が悟り、今からでも正しい道に立ち返るようにと働きかけられたのです。

この状況を前にして弟子たちはどう行動したでしょうか。彼らは「主よ。剣で撃ちましょうか。」と言い、ある者が大祭司のしもべに撃つてかかり、右の耳を切り落とします。ヨハネの福音書によると、これをしたのはペテロでした。彼はとにかく何とかしようとして、剣を振り回したのでしょうか。その行為は主の御心にかなうことではありませんでした。イエス様は「やめなさい」と言われます。ここに私たちは個人的に武力で対抗してはならないことを教えられます。確かにローマ書 13 章にありますように、公的な立場にある人には剣が与えられています。その人々は悪を行なう者を罰し、善を行なう者をほめるために剣の権能を与えられています。しかし個々人が自分の勝手な判断で、剣を用いることを聖書は禁じています。イエス様はむしろ、大祭司のしもべの耳にさわって、彼を癒されました。これは「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」とイエス様がずっと言って来られた原則の実践です。

イエス様は押し掛けて来た人々に対して、「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってやって来たのですか。あなたがたは、わたしが毎日宮でいっしょにいる間は、わたしに手出しもしなかった。」と彼らのやり方の不当性を非難しています。しかしその一方で「今はあなたがたの時です。暗やみの力です。」と言って、彼らの手に引き渡されることを良しとされます。あまりにもあっさりと逮捕されてしまい、もう少し何かできなかったものか、と私たちはもどかしくも思います。しかし 53 節には大切な真理が語られています。「今は、あなたがたの時です」という言葉は何を意味しているのでしょうか。それは今は彼らの時と言えるが、それはいつまでもではないということです。その「時」にはやがて終わりが来て、「彼らの時」ではない「時」が来る。さらに言えば、こう言えるということは、「あなたがたの時」と言われているこの時も、神の御手の下にあるということです。神はここからも良いものを取り出すご計画を持っておられたので、彼らに今、このことを許されたのです。イエス様は力強い神の主権

の御手が、この暗やみの力の上にもあることを見て取って、その御心と摂理にご自分を委ねられたのです。

さて、イエス様はこのようにしてあつという間に捕らえられ、引かれて行きました。他の福音書を見ると、弟子たちはみなこの時、イエス様を見捨てて逃げてしまったようです。そんな中、ペテロが、そしてヨハネの福音書から分かるようにもう一人の弟子ヨハネが、イエス様の後について行きます。ペテロは 33 節で「主よ。ごいっしょになら、牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております。」と言いましたが、確かに彼はまずイエス様について行ったのです。しかしイエス様の警告を真の意味では受け止めず、祈りの準備もしなかった彼は、果たしてどこまでイエス様に忠実であり得たのでしょうか。彼にさっそく試みの時が訪れます。人々が大祭司の家の中庭で火をたき、座り込んでいたところにペテロも混じって腰をおろしたところ、一人の女中がまじまじと見て、こう言います。「この人も、イエスといっしょにいました。」ペテロはこの瞬間、全身が凍りつくような衝撃を覚えたことでしょう。このままでは自分も主と同じように捕らえられ、どんな目にあわされるか分からない。そこから逃れる方法はただ一つ、「私はあのイエスとは関係がない」と宣言することです。彼は心の中では慌てつつも、できるだけ平静を装って、「いいえ、私はあの人を知りません」と答えます。このようにペテロの恐るべき大罪は、一人の名もなき女中の声から始まりました。祈っていない時、人は木の葉一枚落ちる音にビクビクするのです。神との関係がしっかりしていないと、私たちは人の声や評価に震え上がって、不本意な生き方へどんどん進んでしまうのです。

その彼に二度目の試みが襲いかかります。58 節：「しばらくして、ほかの男が彼を見て、『あなたも彼らの仲間だ』と言った。」マルコの福音書を見ると、この二回目も、先の女中が関わっていたようです。彼女はそばに立っている人に「この人は、あの仲間です。」と言い、それを聞いた一人が、このルカの福音書に記されている言葉をペテロに語ったのでしょうか。頼むから、もうこれ以上、何もしないでくれ！と願うペテロの心とは反対に、あの女中は歩き回って余計なことを人々に告げ回る。ペテロとしては、心臓がバクバクして、生きた心地がしません。そして「いや、違います。」と答えることしかできない。

そうしてついに 3 回目の時がやって来ます。59 節に「一時間ほどたつと」とあります。あの女中の執拗な活動も止まり、周りの人たちとだんだん打ち解け、何とか一息つけるだろうかという状況が出て来た時でした。今度は別の男が「確かにこの人も彼といっしょだった。この人もガリラヤ人だから。」と言い張ります。ヨハネの福音書によると、これは先に耳を切り落とされた大祭司のしもべマルコスの親戚に当たる人だったようです。きっと彼は他の人以上に、ペテロを暗やみの中でも厳しい目で、目を凝らして見ていたのでしょうか。ペテロはそれに対して「あなたの言うことは私にはわかりません。」ととぼけるのが精いっぱい。下手に受け答えせず、コミュニケーション不成立の論法に逃げ込み、自分の身を救い出そうとした。

その時、ペテロの三回に渡る否認を待っていたかのように、鶏が鳴きます。そしてイエス様とペテロの目が合います。ペテロはその時、イエス様の言葉を思い出しました。ペテロはあの時、自分は絶対大丈夫と言い張りました。たとい死ぬようなことがあっても、あなたを知らないなどとは決して言わない、と力を込めて主張しました。ところがこのザマでした。イエス様は自分を3年間に渡り、育み、導き、限りない愛を注いでくださった方です。その方を知らないなどと言うことは、ありえない無礼です。そんなことをするのは最低最悪な人間です。ところがまさにそれをしたのが自分でした。自分は自分が思っていたような存在ではなく、思い浮かべてみたこともないような恐ろしい人間であった。都合一つで、いくら感謝しても感謝し尽くせない方を、平気で見殺しにする自己中心の塊でした。ペテロはその自分に絶望し、外へ出て激しく泣かざるを得なかったのです。

このような今日の箇所、私たちの救いとなるのは、こんなペテロを主が振り向いて見つめられたとあることでしょう。注目すべきは、鶏が鳴いた時に主が振り向いたとあることです。これは何を意味しているでしょう。それはイエス様が大変な試みの中でも、どんなにペテロのことを思ってくくださったかということです。63節から記されるように、イエス様はすでに耐えがたい扱いを受け始めていました。しかし鶏の声を聞いた時に、イエス様はまずペテロのことを思ってくくださった。ご自分へのあわれみ、自己憐憫の思いで一杯だったのではなく、まずペテロのことを思って、振り向き、彼を見つめてくださったのです。ここに示されていることは、イエス様はペテロが罪を犯した時も、ペテロを愛してくくださったということです。私たちは罪を犯したら、自分がふさわしい人間になるまでは神に愛されることはないと考えやすい。こんな自分をどうして神が愛してくくださるだろうか、と思う。しかしイエス様は、ペテロがこの罪を犯した時も、彼を愛し、彼を見つめてくださった。その目は、そんな彼を救うことができる恵みを持つご自身のところへ、悔い改めをもって立ち返って来るようにと招く目でもあったでしょう。イエス様はこのような目を持つお方として、十字架へ進んでくださったのです。罪の中にある私たちを見つめ、あわれんでくださって、私たちが贖うための十字架へ進んでくださったのです。

ペテロはこのイエス様のまなざしに触れて、すぐ立ち直ったのではなく、なおイエス様の十字架と復活の出来事が必要でした。彼は後に、復活された主と会い、こんな自分のために祈り、身代わりの死を遂げ、すべてを精算してよみがえってくださった主の前にひざまずいて立ち直るのです。ペテロはこのプロセスを通して本当の悔い改めへ導かれます。ここがユダとの大きな違いです。よくユダとペテロはイエス様を裏切った点では同じと言われます。もちろんより詳しく見れば、それぞれの罪は随分違います。ユダはイエス様からの警告の言葉を繰り返し聞きながら、熟慮の上でイエス様を裏切ったのに対し、ペテロは弱さのゆえに、突然の誘惑に負けてしまったというものでした。しかし決定的に違う点は悔い改めです。ユダは後に自分の罪を振り返って悲しみました、それは罪の苦々しさを嘆いて後悔しただけのことでした。彼は神に立ち返らずに、自分で命を絶ちました。しかしペテロは主の恵みに支えられつつ、主の招

きに応答して悔い改めました。

ペテロはこの悔い改めを通して、大きく変えられます。彼は先には女中の声に震え上がった人でしたが、やがて真昼に福音宣教をする人になります。主の弟子であることを公に現わし、牢に入れられても主の言葉を話さないわけにはいかない、と語り続ける人となります。また彼は、イエス様が 32 節で言っていたように、兄弟たちを力づける人となります。もし彼がここで挫折せず、自分の力で主に従い通したなら、きっと益々高慢になって、他の人をみな見下す人になったでしょう。オレだけが主に忠実と自分を誇る人になったでしょう。しかしこの経験を経て、彼は他の人々に同情することができる人となる。人々の涙を拭いてあげ、キリストを指し示すことによって優しく人々を励まし、力づけることができる人となるのです。

私たちもペテロと同じように、様々な罪を犯してしまう者です。自分自身の本当の姿に直面して落胆し、失望し、絶望することもあるでしょう。しかし今日の御言葉から心に刻みたいことは、私たちが罪を犯した時も、イエス様は私を愛しておられるということです。愛される価値などない私を、イエス様はなお愛の目で見てくださり、十字架の恵みのゆえに、悔い改めをもって、ご自身に立ち返って来るように招いてくださっている。大事なことは、このイエス様の目を見上げて、悔い改めの道に進むことです。それをせずに罪に居座るなら、それはユダの道に行くことです。そうではなく、なおも愛のまなざしをもって見つめていて下さる方のもとに行って、自分の罪を告白し、赦しと聖めを願うこと。そして十字架の恵みによる新しい生き方を祈り願い、その一歩を踏み出すこと。そのように主に立ち返るなら、私たちは主の恵みを頂いて、今までよりももっと大胆に、主に従い、主の働きのために仕えることができるのです。また優しいへりくだった心を頂いて、兄弟たちを励まし、力づけることができる喜びに生かして頂くことができるのです。